

南山大学の Academic Community に寄せて

南山大学長 ミカエル・カルマノ

タイトルは Academic Community（毎年の「学長方針の直訳で「学的共同体」）となっているが、少し回り道をして別な Community（共同体）から本論に入る。この Community とは南山大学管弦楽団である。

2014 年の 11 月 16 日（日）の第 100 回定期演奏会に参加して強く感じたことがある—それは、同じイベントに参加しても、その受け止め方は人それぞれ大きく異なる、ということだ。現役の学生にとっては、「今、ここで」自分がメインを勤める大事な演奏会であり、次の 3 月に卒業を控えている 4 年生にとっては、部員として友人と一緒に、最後のコンサートである。正式的な部員ではなかったが、私は、南山大学文学部神学科在学中、第 17 回から第 22 回までの定期演奏会の練習と本番で楽団に参加していた。昨年の第 100 回定期演奏会では、私は演奏された曲の中で（深刻な練習不足のため）、「平和のための祈り」だけでバイオリンを弾かせて頂いたが、やはり学生時代の色々な想いが蘇ってきた。現役の学生と一緒に演奏した OB・OG、そして聴きに来てくださった OB・OG もきっと同じような心境でこの第 100 回定期演奏会に臨んだと思う。また、管弦楽団の創立当初から関わっていた先輩が懇親会の場で語った初期の頃の困難が多かった時代の話は、世代を超えて、管弦楽団の大切さを再確認させるきっかけとなったに違いない。舞台上上がって演奏した人、演奏を聞いた人のそれぞれの思いは異なっていたかもしれないが、皆「同じ南山大学管弦楽団」のことを語っていたことは今でも印象に残っている。役割（そして楽器）はそれぞれ違うが、時代を超

えて音楽が結びつけている Community, それが現在まで続いている南山大学管弦楽団である。

管弦楽団より4年先に始まったのは南山学会の機関誌である ACADEMIA の発行だが、そのうちから今回第100号を迎えるのはこの『アカデミア』文学・語学編である。『アカデミア』は「文学・語学編」, 「社会科学編」, 「人文・自然科学編」, 「理工学編」等、いくつかの分野に分かれて発行されているが、研究者として活動している南山大学の専任教員の声を世間に発信する定期演奏会のようなものではないか、と私は考える。つまり、系列別に発行されている『アカデミア』は、学問の向上に貢献することを目指している先生方の学術論文を結集して、各分野を超えて真剣に学問(“academic”)に取り組む共同体(“community”)の精神を具体的に示しているのである。言うまでもなく、多少の不協和音もこのような大きな曲には欠かせない側面であろう。

先生方一人一人の努力がまとまった形で発信されることこそ南山学会の『アカデミア』の重要な役割である。それを強く感じたのは『アカデミア』の創刊を手にしたときだった。1952年に出版された創刊での南山学会のローマ字表記はラテン語の“Nanzan Societas Scientifica”であったが、これはまもなく英語の“Journal of the Nanzan Academic Society”に変わった。しかし、発行する機関は今でも NANZAN UNIVERSITY (The Catholic University of Nagoya) となっている。(1954年に発行された第8号文学編には「¥200」という値段も表記されていたが。) カトリック大学である南山大学が研究・教育で社会に貢献し続けてこられたのは、積極的に『アカデミア』を通して発信してくださった先生方のおかげである。南山学会を構成する幅広い分野の声は、『アカデミア』等を通して、今後も南山大学の Academic Community の良さを力強く発信していくように祈っている。